



Title	中英語ロマンスにおける反ロラード主義? : Le Bone Florence of Rome とその写本をめぐって (その2)
Author(s)	田尻, 雅士
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2005, 29, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99292">https://hdl.handle.net/11094/99292</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 中英語ロマンスにおける反ロラード主義？－ *Le Bone Florence of Rome* とその写本をめぐって（その2）

田 尻 雅 士

「その1」（『大阪外国語大学 英米研究』28号（2004年）、pp. 135-48）梗概：第1節では、中英語韻文ロマンス *Le Bone Florence of Rome*（『ローマの善女フローレンス』）の中で、化体説に言及した科白がフローレンスにより二度にわたり発せられることを確認し、それらが化体説に異議を唱えていた「異端者」、Lollards に対抗して作者もしくは写字生によって書き込まれたものである可能性を指摘した。第2節では、このロマンスが収められた写本、CUL MS Ff. 2.38のマニュスクリプト・コンテクストを考察した。この写本には同一の写字生が筆写した‘A good ensaumple of a lady þat was in dyspeyre’という短い教訓話がある。化体説を信じなかった女性が改心する内容であり、おそらく反ロラード的視点から書かれたものであることを確認した。

## 3. ‘Hyt stekyth in my hals’: 『フローレンス』に見られる反ロラード的要素

「司祭たちがパンの姿で示すお方と結婚します」と宣言して義兄マイルズとの結婚を拒んだフローレンスであったが、結局、彼女は好色な義兄の奸計に嵌まり、森の中へ連れていかれる。聖母の計らいでなんとか辱めは受けずに済むものの、彼女は大層空腹を覚える。やがて二人は一人の隠者に出会い、食べ物乞う－

The Armyte seyde, ‘Soche as Y ete

Ye schall haue, dere damysell Y say.’

A barly lofe he broght hur too,

And gode watur ; full fayne was scho,

That swete derworthe maye.  
Therof the yonge lady ete,  
Sche thoght neuyr noon so swete,  
Be nyght nodur be day.  
Mylys ete therof als ;  
He seyde, 'Hyt stekyth in my hals,  
I may not gete hyt downe.  
Chorle, God yf þe schames dedd,  
Brynge vs of thy bettur bredd,  
Or Y schall crake thy crowne.'  
'Be God,' he seyde, 'þat boght me dere,  
I had no bettur thys vii yere.'  
The wykkyd man þo made hym bowne,  
In at the dore he hym bete,  
And sethyn fyre vpon hym sete,  
Ferre fro euery towne.

The holy Armyte brente he thare,  
And lefte that bygly hows full bare,  
That semely was to see. (Il.1463-85 ; 下線引用者)<sup>12</sup>

求めに応じて隠者は大麦パンと清水を二人に与える。フローレンスはパンを美味しく食べるが、マイルズは「喉にひっかかる」と言って嚥下することもできない。彼はもっと良質のパンを要求するが、貧しい隠者にそのような物があるはずもなく、やんわり断られてしまう。これに激昂したマイルズは隠者を家に閉じ込め、焼き殺してしまう。私は、大麦パンと清水は聖餐式のパンと葡萄酒を暗示していると考え。水と葡萄酒という違いがあるわけだが、この点に関しては「ヨハネによる福音書」(2:1-11)にあるカナの婚礼のエピソード

ソードを思い出さずにはいられない。カナの地で結婚式に列席していたイエスは、葡萄酒がなくなってしまったので、水瓶6杯分の水を葡萄酒に変える奇蹟を行った。しかもその葡萄酒はそれまで供されていたものよりも良質であったという。これはイエスが行った最初の奇蹟であるとされる。また大貫

隆、他・編『岩波キリスト教辞典』によれば、この奇蹟譚が初期キリスト教美術に描かれる場合、パンと魚の増加の奇蹟とともに聖餐を表象したという (p. 222)。このロマンスで葡萄酒が水に置き換えられているのは必ずしも奇異なことではないのである。

さて、ここで引用した箇所はフランス語版ではどうなっているであろうか。*La Chanson de Florence de Rome* から引いてみようー

《Vrai pere de gloire》, dist el, 《de moi vos pri ; / J'ai le cuer et le cors de grant fain esvani. / Hé! Deus》, dist la roïne, 《par la vostre merci, / Ja n'est il hom ne feme tant ait le cuer marri / Que ne vuelle mengier; folle costume a ci.》 /... / ...quant il fu avespri, / Lez un val soutif truevent un mout bel fonteni / Et une viez chapelle, faite dou tenz anti. / Iluec ot un hermite, tot viel et tot flori, / Bien ot ilec cent ans nostre seignor servi ; /... / 《Dame》, dist li hermites, 《je croi tresbien de fi / Que cil sires vos fist que le siecle basti. / Por quoi vos gamentez et vos dementez si? / Certes, que mal vos fait mout a Deu relenqui, / Car bien resemblez femme qui Deu a a ami. /... (フロランスが身の上話を語る) /... / Li sains hons en son cuer mout grant pitié en a, / N'avoit c'un seul pain d'orge, la moitié l'en dona / Et Milon donne l'autre, que mout mal l'enploia. / Florence prist le pain, un petit en menja, / Car la paille estoit grose, forment la redota. / Milles menja le suen au pooir que il a, / Mès au premier morsel par poi n'en estrangla, / Car li pains fu mout aispres, quant la gorge avala. / 《De Deu》, dist li traïte, 《que tot le mont forma, / Soit la braice maudite que cest pain bureta! / A celui quel menjue ja nul bien n'en fera / Fors seul le ventre amplir. Mal ait quel gaaigna!》 / Florence tint le pain, dont la paille estoit granz, / Un petit en menja, isi fu ces talanz. /... (隠者の質問とフロランスの身の上話が繰り返される) /... / 《Sire

moine », dist il, «Deus confonde vos denz! / Qu'an avez vos a fere? Trop iestes enquaranz. / —Certes», dist li ermites, .../.../...Trop iestes mescreanz! » /.../ Et Milles l'i enferme, que mout fu malfesant, / Puis a bouté le feu environ de toz senz, / Que le moutier a ars et l'ermitte dedenz. (ll.3845-3932)<sup>13</sup>

フランス語版は英語版より冗長で繰り返が多いが、その他にも興味深い相違点が見られる。フロランスが空腹を訴えている点では英語版と同様である。しかし第一に、憐れむ隠者は二人に大麦パンを与えるが、水への言及はない。第二に、せっかくパンにありついたのに、彼女はパンの中の麦藁一残り滓であろうか—に怯えて食が進まない。英語版で嬉々としてパンを食べるフローレンスと対照的である。第三に、英語版では義兄はパンが粗悪であることに端を発して隠者を焼き殺すが、フランス語版では、確かにパンが気に食わない様子ではあるが、焼き殺す直接の原因は、彼が隠者の「詮索好き」に腹を立てた上に、相手に詰られたことである。<sup>14</sup> 以上の英語版における改変は、私は意図的になされたものであると考える。先に見たようにパンと葡萄酒の表象であるパンと清水を素直に受け入れられないマイルズは、それを嬉々として食するフローレンスと対置されて、ロラードを一特に聖餐式自体を拒絶したロラードを—表象しているのではないか。しかも彼はそれを提供してくれた隠者—仮にも聖職者である—を将にパンが原因で殺害してしまう。正統派キリスト者であるフローレンスに ‘eucharistic tag’ で拒絶されたマイルズは、いよいよその本性を露呈するのである。言うまでもないことだが、ロラードの「異端性」は今日の尺度で見れば何程のこともないし、むしろその言説には耳を傾けるべき点も多い。しかし、中世後期の教会や正統派キリスト者は、戦略的に彼らを悪意に満ちた「他者」に仕立てあげる必要性を感じていたのであろう。

ウィクリフやロラードが教皇に反感を抱いていたことはよく知られている。‘Sixteen Points on which the Bishops accuse Lollards’ という文献があるが、これは司教たちがロラードの「誤った」信条と断じた16の「罪状」を列挙し、ロ

ラードがこれに反論を加えるという形をとっている。その第4項目において、司教らは「ロラードは聖ペテロ教皇以降、教皇など存在していないと主張している」と指摘している。これに対して、ロラードは次のように論じる（引用は Hudson, ed. より）－

Also we beleuen þat oure lord Iesu Crist was and is cheffe bischoppe of his chirche, as seint Peter seiþ, and schal be vnto þe dai of dome. And we supposen þat þer han ben many hooli faderis, popis, siþen seint Petrus tyme, þouȝ þis name ‘pope’ be not seid in Goddis lawe.... And so we graunten þat þe pope of Rome schulde next folowe Crist and seint Peter in maner of lyuynge, and, if he do so, he is worþily pope, and, if he contrarie hem moost of al oþer, he is most anticrist. (p.21)

キリストやペテロの教えに違背する教皇は反キリストだと言うのである。また、司教らは第6項目において、「ロラードたちは、教皇や司教に贖宥を与え  
る権限はなく、むしろ下位聖職者の方にその権限があると主張している」と  
糾弾している。これに対するロラードの反論は次のようなものである－

Also we graunten þat boþe þe pope and bischoppis moun lefully and medefully graunte suche pardouns and indulgence as ben grunded in hooli write, and þat in þre maners. Oon is þat þei moun bi þer office denounce or schewe þe wille of God, houȝ he forȝeueþ synne, and þat trewe denouns[i]ng is forȝiuyng be þer office of presthode. In þe secunde maner þei moun forȝeue and relese penance folily enioyned to men and folly avowes and boondis þat men haue bounden hemself wiþ, and þat is clepid indulgence or dispensacioun. And in þe þridde maner þei moun forȝeue trespas þat men han doun aȝens hem in as myche as liþ in hem, and so it is vnderstanden þat Crist seiþ in þe gospel, ‘Forȝeueþ, and it schal be forȝeuen to ȝow.’; and

þus whateuer synnes þei schullen forziue, þei ben forzeuen, and whateuer  
þei losen vpon þe erþe, it schal be losed in heuene. Neþerles sale-pardouns  
þat smacchen symonye makeþ boþe þe graunter and hym þat bieþ it acursed  
of God. (pp.21-22)

教皇や司教は、聖書に根拠があり、三つの条件を満たせば贖宥を与えることができる、というのである。さらに金銭目的の贖宥は罰当たりであると述べている。

『フローレンス』では教皇はめざましい活躍ぶりを見せる。そもそも、この作品を書いたのは教皇シモンド (Symonde) であるということになっている (スタンザ182)。教皇はエミアに戴冠させて、彼とフローレンスを結婚させ (スタンザ84)、マイルズに忠誠の誓いを強要されたエグラヴェインに対し ‘Syr, Y schall telle þe a sekyr tale, / Hyt ys bettur brokyn then hale, / I set my sowle for thyne’ (ll. 1129-31) と告げて免責し (スタンザ95)、マイルズ一味を幽閉し (スタンザ95-96)、復権したフローレンスと夫を盛大にローマの町に迎え入れる (スタンザ180)。ちなみに Dieter Mehl によれば、フランス語版では教皇はここまで物語に関与しないという (p. 144)。

ロマンスの「作者」としての教皇シモンドと、物語に登場する教皇が同一人物かどうかは不明であるが、Heffernan はその版本の注で、Symonde という名前を初代教皇シモン・ペテロと結び付けて考えている (p. 137)。一方、ロラードはペテロをパウロより格下としている。いろいろ根拠は挙げているが、結局は教皇への敵愾心の現れと見てよいだろう (Hudson, ed., pp. 123-25参照)。教皇がエグラヴェインを免責するくだりは、上に引用したロラード文献における贖宥が認められる第二の条件を想起させる。無意味な誓いはこれを無効化できるというのである。だからと言ってロラードに迎合しているとか、親ロラードであるということにはなるまい。むしろロラードによる批判の余地を与えないような「義なる教皇」を演出していると言えるのではないか。<sup>15</sup> 悪事が暴かれたマイルズとその一味を幽閉する際、教皇は聖職者たち

と俗人たち三百人を武装させ（‘Than he gart arme of þe spyrytualte, / And of the seculars hundurdys thre’ ll.1132-33）、いわれのないマイルズとフローレンスの結婚をこわすために宮殿に行かせる。一行はマイルズとその一味の手足を縛るが、一人も殺そうとはしなかった（‘But they wolde slee not oon’ l.1140）。Hudson によると、ウィクリフらは、1383年にノリッジ司教 Despenser が教皇ウルバヌスの名においてしかけた武力攻撃－双方のキリスト者に多くの死者が出たという－に激怒し、聖職者による軍事行動への参加および煽動をきつく戒めた（*The Premature Reformation*, pp.333-34,368）。『フローレンス』の教皇が行ったのも、ある意味で聖職者が参加する軍事行動である。しかし相手は明らかな悪人であり、しかも攻撃する側には殺害の意図はない。再び義なる教皇が演出されている。本ロマンスの教皇はある意味でロラードの基準にも適うような正しい人物である。繰り返しになるが、だからと言って親ロラード的という訳ではなく、教皇権を正しく行使する権威と正義に溢れた教皇像が強調されている。一方、ウィクリフやロラードはいろいろな附帯条件をつけながらも、結局は一貫して反教皇的であったのである。

中世後期のイングランドではマリア崇敬熱が顕著であったことは夙によく知られている。その中にあって、マリア崇敬に批判的であったのがロラードたちであった。‘Sixteen Points on which the Bishops accuse Lollards’ の第11項目で、司教らは「ロラードは聖母や聖人に祈るのは正しくなく、神のみに祈るべきであると主張している」としている。これに対するロラード側の反論は以下のようなものであった－

Also we graunten þat it is boþe leueful and medeful to preie to oure Lady and to alle halowus, so þat þe entent of oure preiour be do principally to Goddis worshiþe. And in oure preiouer we schulden not þenke þat oure Lady or oþer seyntis mowun graunte any þing of hemself, but þei knowen Godis wille and preien þat it be fully don, and so þer preier is herde....(p.23)



要するに神あつての聖母であり、聖人であるということになるうか。しかしウィクリフが主導権を握っていた時代にはまだしも穏健であった聖母観も、次第に過激になっていった。Hudson の報告によると、年代記作家 Henry Knighton は、ロラードがリンカンやウォルシンガムの聖母像を侮蔑し、さらに別の聖母像に対し「もし首をちょん切って血が出たら敬ってやる」と述べて、実際に首を切ってしまったと記している (*The Premature Reformation*, p.76)。

『フローレンス』は他のいくつかのロマンスがそうであるように、極めて聖母崇敬の色濃い作品である。フローレンスは聖母の加護により、二度にわたり辱めを受けることを逃れる。一度目は義兄マイルズが森の中で彼女を手込めにしようとする際においてである――

And þere he wolde by hur haue layne,  
But sche preyed God to be hur schylde ;  
And ryght as he was at assaye,  
Hys lykyng vanyscht all awaye,  
Thorow þe myght of Mary mylde.

(ll.1496-1500 ; 下線引用者)

興味深いのは彼女はまず神に祈っているが、マイルズの劣情が萎えるのは聖母の力によるという点である。ロマンス作家にどれ程の意識があったかは定かでないが、ロラードの見解とは正反対に、聖母が主体であるような印象すら受ける。二度目に聖母が関与するのは、奸計によりフローレンスを「買った」好色な船長が彼女を犯そうとする際においてである。今度は彼女は、航海の守護者 ‘stella maris’ たる聖母に祈りを捧げる――

Sche seyde, ‘Lady Mary free,  
Now thou haue mercy on me,  
Thou faylyst me neuyr at nede.

中英語ロマンスにおける反ロラード主義？

Here my errande as þou well may,  
That Y take no schame today,  
Nor lose my maydynhede.’ (ll.1852-57)

すると嵐が起こり、船は沈んでしまうが、彼女は辱めを受けることもなく九死に一生を得る。拙著で詳しく述べたので軽く触れるにとどめるが、本ロマンスの類話やフランス語版では聖母の関与はこれほど顕著ではない。例えば *Gesta Romanorum* 中のある類話では聖母はまったく言及されないし、Thomas Hoccleve の作品では船上で主人公が祈りを捧げるのはイエスに対してである、といった具合である (pp. 97-127)。ロラード的観点からすれば、特にウィクリフより後の過激なロラードの観点からすれば、『フローレンス』における聖母の「活躍ぶり」は眉を顰めるような類のものではなかっただろうか。

*The Canterbury Tales* を引き合いに出すまでもなく、聖地巡礼は後期中世に極めて盛んであったが、ロラードはこれにも懐疑的であった。<sup>16</sup> ‘Sixteen Points’ の第13項目で、司教らはこのことを槍玉に挙げている。これに対するロラード側の見解は次のようなものである－

Also we graunten þat it is leueful and medeful to go on pilgrimage  
to heuenwarde, doing werkes of penance, werkis of riȝtfulnes and werkis of  
mercy, and to suche pilgrimage alle men ben boundoun after þer power wile  
þei lyuen here.... Suche pilgrimage mai we wel do wipout seching of dede  
yimages and of schrynes. (p.23)

要するに物見遊山じみた巡礼はよろしくない、という趣旨であろう。また最後の一節からわかるように、偶像崇拜への批判と巡礼批判は表裏一体の関係にあった。Hudson によれば、ロラードは、巡礼で散財するぐらいなら、その金銭を貧者に与えるべきであり、当時盛んであったウォルシinghamやカンタベリーへの巡礼を特に嘆かわしいと感じていたという (*The Premature Refor-*

mation, pp.308-09)。しかしロラードの眼鏡に完全に適うような巡礼をする人々は少数であつたに違いない。

フローレンスは流浪の最中にエルサレムへ行くことを思いつく。そこで夫の消息が知れるだろう、というのである――

Sche thynkyth, 'Mygt Y come ouyr be see,  
At Jerusalem wolde Y bee,  
Thedur to ryde or ga ;  
Then mygt Y spyr tythandys of Rome,  
And of my lordys home come ;'  
But now wakenyth hur waa. (ll.1738-43) <sup>17</sup>

1743行目で暗示されているように、このエルサレム行きはしかし結局実現しない。彼女が絞首台から救い出し自分の小姓にしたクレアボールドとその仲間の町奴、および前述の船長によって邪魔され、頓挫してしまうのである。もちろん、フローレンスが物見遊山や散財目的でエルサレム行きを志した訳ではない。(なお、彼女は夫の消息を知りたいのであって、「巡礼に行く」とも言っていない。しかし、外見的には一応巡礼のような旅であろう。) 言い換えれば、この実現しない「巡礼」はむしろロラードの主張にも適うようなものになっていた可能性が強い。忌むべき金銭欲や情欲に取りつかれているのは三人の悪者の方である。しかし、ロマンスの作者がロラードの思想―巡礼にもよいものと悪いものがある―にそこまで精通していた可能性は低いと思われる。むしろロラードと言えば反巡礼、という意識があり、フローレンスの「巡礼」を悪者が阻止することで、反ロラード的志向は一応示されたと言えるのではないだろうか。

エルサレム行きも見果てぬ夢となり、沈没した船から命からがら陸に辿り着いたフローレンスはベヴァフェアーと呼ばれる女子修道院に身を寄せて、そこで修道女となる。この修道院は聖ヒラリウス (St Hilary) に捧げられたも

のであった：‘Of Seynt Hyllary þe churche ys, / The twenty day of ȝowle Y wys, / As ye may vnderstande’ (ll.1894-96)。クリスマスから20日目のことであったと述べられているが、この日はちょうど1月14日のヒラリウスの祝日にあたる。この聖人 (c.315-c.368) はボワティエの司教であったが、キリストの神性に否定的なアレイオス派に対抗して正統派の教義を擁護した。ロラードが聖母崇敬に反対していたことに触れた際にも述べたが、彼らは聖人崇敬にも批判的であった。また、Kantik Ghosh が指摘していることであるが、反ロラードの論客であったトマス・ネッターが、化体説擁護の文脈でアウグスティヌスやクリュストモスと並んでヒラリウスに言及しているのは注目に値する (p. 200)。正統派カトリックを体現するようなこの聖人を記念する修道院にフローレンスが身を寄せたことは、反ロラードの立場からすればまことに当を得たことと考えられたであろう。<sup>18</sup>

このロマンスの大団円について触れなくてはならない。修道女となったフローレンスは病を癒す力を身につける。罰が当たったのかそれぞれ病を患う悪人四名－マイルズ、本稿では話題にしなかったがフローレンスを冤罪に陥れたマカリー（「その1」に掲載のロマンス梗概参照）、クレアボールド、船長－は「名医」がいることを聞きつけて、フローレンスとは知らずに、女子修道院を訪れる。さらに、怪我に起因する障害に悩む夫、エミア皇帝もやってくる。フローレンスに気づくのはエミアだけである。彼女は悪人たちに懺悔させたのちに、彼らを癒してやる。<sup>19</sup> せっかく病が癒えた四人であるが、おのおのの罪状がエミアに知られてしまった訳で、彼の命令ですぐさま処刑される－

He made to make a grete fyre,  
And caste þem yn wyth all þer tyre,  
Then was the lady woo. (ll.2119-21)

Heffernan もその版本で明らかにしているように、フランス語版 *Florence de*

Rome では焚刑は描かれていない (p. 24)。焚刑はロラードを含む異端者に特に課せられた刑罰であった。たった一行、フローレンスの憐れみの様子が描かれるものの (l.2121)、勧善懲悪こそがこのロマンス作家の至上命題であった：‘Forpþy schulde men and women als, / Them bethynke or þey be false, / Hyt makyth so fowle an ende. / Be hyt neuyr so slylye caste, / ʒyt hyt schamyþ þe maystyr at þe laste, / In what londe þat euyr þey lende. / I meene be thes iiiii fekyll, / That harmed feyre Florence so mykyll, / The trewest that men kende’ (ll. 2176-84)。<sup>20</sup> かくして悪者によって乱された秩序は回復し、エミアとフローレンスはローマ教会の最高権威者の歓迎と祝福を受け、ローマの町に帰還するのである。

#### 4. 結論

本稿では、中英語ロマンス『ローマの善女フローレンス』の中に反ロラード的要素が見られることを指摘してきた。もちろん、本ロマンスはフランス語の原作の翻案であり、英語版のプロットはそれに負うところが大きい。しかしイングランドのロマンス作家は、原作をうまく活用しつつ、一部改変を加えてロラードに対抗する正統派教会の正当性を打ち出そうとしたのではないだろうか。特にフローレンスが発する英語版固有の ‘eucharistic tags’ は、明確に化体説の教義を表現しているし、その後のフローレンスおよびマイルズと隠者のやりとりは、フランス語版と対比するとき、ロラードへの意識がかなり鮮明に表されているように思える。英語版『フローレンス』が成立したのは1400年頃であり、ロラード弾圧の熱気が冷めやらず、一方で潜行していった彼らの思想が民衆に浸透していった時代であった。しかし写字生の関与ということは考えられないであろうか。もちろん、写字生が本ロマンスの exemplar(s) を大幅に改変したということは考えにくい。しかし、1500年頃－15世紀末にはロラード運動が再び活気づいたとも言われる－に制作された CUL MS Ff. 2.38には化体説を擁護する教訓話が収められている。制作されたのはロラードのかつての本拠地レスタチャーである。マニュスクリプト・コンテキストを考慮に入ると、少なくとも ‘eucharistic tags’ は scribal editing

である可能性も拭いきれない。<sup>21</sup>

『フローレンス』は洗練された名作とはいいがたい。Leeは、このような作品に過度の宗教的シンボリズムを見いだすことには慎重である (pp. 150-51)。私もこの点には一応同意する。「ロラード」という文言が一言でもある訳ではない。また中英語ロマンス、特に「ユースタス・コンスタンス・フローレンス・グリゼルダ伝説」などに同時代の社会的、歴史的背景が如実に投影されていることは稀であると考えられている。ロマンス作家もしくは写字生の反ロラード観は、意識的というよりも副意識的に『フローレンス』の中に潜んでいるに過ぎないのかもしれない。しかし副意識的にもせよ、ロマンス作品に当時の宗教的心象風景が垣間見えることは十分あり得たのではないか。少なくとも、ロラード主義を信奉する者がこの作品を読んだとすれば、少なからず offensive に思えたと思像されるのである。

Fiona Somerset は、近年出版されたその共編著書の 'Introduction' の中で、所収の各研究者の論考を踏まえて、極めて示唆に富む見解を表明している。文学研究者は、当時の人々をウィクリフ派、反ウィクリフ派、関わりあいを恐れて沈黙を決め込む者に分類しがちだが、ウィクリフ派と反ウィクリフ派の間には、ウィクリフ派の主張に知悉していても、批判するでもなく、また安定した社会的地位ゆえに、それに興味を示しても咎められることのなかった穏健派の audience が大勢いたのだという (p. 13)。また、ロラード派は、思われているほど周縁的でも反抗的でもなく、むしろ彼らの著作は当時の文学風土において重要な位置を占めていたのだとも述べている (pp. 13-14)。これを認めるならば、筆者は『フローレンス』を巡って、ロラード対反ロラードという、あまりにも二項対立的な構図を描いてきたのではないかと不安になる。しかしロラードがいれば、反ロラードも間違いなく存在した。Somerset ももちろんそれを否定している訳ではない。そこでこうは考えられないであろうか。『フローレンス』やその写本の読者・聴衆はロラードの考え方かなり通じていた。その中には反ロラード主義者も少なくなかったであろうが、皆が皆、必ずしも強硬な反ロラードという訳ではない。そこで反ロラード的

思考の作者なり写字生なりが、このような中間層の人々をターゲットとして、ロマンスやその写本にロラード攻撃を忍ばせた。Somerset の考えを適用するならば、そのロラード攻撃がいかに implicit なものであれ、読者・聴衆はそれを認識することができたのではないであろうか。このことは、ロマンスに「同時代の社会的、歴史的背景が如実に投影されることは稀」とした先程の見解に矛盾するかもしれないが、今やこの認識こそ見直しが必要なかもしれない。Somerset の一節を引いて、筆を擱くこととする－

[T]heir [Wycliffites'] writings were also widely read and their ideas known by a broader audience of lay noncombatants — the same audience, or at least an overlapping one, that read works of prose devotion, romances, vernacular scientific writings, Chaucer, Langland, Gower, Hoccleve, Lydgate...the list goes on. It follows that no scholar of these writings can afford to ignore what else their audience or audiences were also reading.(p.16)

本稿は日本中世英語英文学会第19回全国大会（2003年12月13日、14日、於・東京外国語大学）での口頭発表を大幅に加筆修正したものの後半部である。以下の参考文献リストには、前号に掲載したものも含めてすべての参考文献を挙げた。また、古フランス語で書かれた *La Chanson de Florence de Rome* ー特にフロランスおよび義兄と隠者とのやりとりのくだりーの読解にあたっては川口陽子氏（神戸大学大学教育研究センター非常勤講師）のご教示を得た。記してお礼申し上げたい。ただし、引用方法および作品解釈についての一切の責任は筆者にある。

#### 注

12. 1474行目は Heffernan の版本の句読点を一部変更した。中世英国ロマンス研究会・訳、p.80、注67参照。
13. 引用は A. Wallensköld, ed.に拠る。版本では連に分けられているが、引用では明示しなかった。
14. 第二、第三の点については Lee も指摘しているが、特にそれについての implication にまで立ち入っている訳ではない (pp.136-37; p.97)。
15. この場面の教皇の免責については、Heffernan, 'Raptus' を参照。

16. 巡礼への懷疑はウィクリフ以前からあった。また、彼自身はこの問題にはあまり関心を示していなかったという (Hudson, ed., pp.179-80)。
17. 夫の消息を知ろうというのなら、ローマに帰ることをまず考えるべきであろう。フローレンスのこの奇妙とも思える決意について、Lee はその版本の注で、物語の冒頭で夫がエルサレムに巡礼することになっている古い類話の痕跡である可能性を示唆している (pp.306-07)。
18. ただしヒラリウスは、その祝日までは明示されていないものの、フランス語版にも言及される。また、ヒラリウスをオーソリティーとして引き合いに出しているのは反ロラードだけでなく、ロラード側にも見られる。‘Sixteen Points’の中で、祭壇上にパン・葡萄酒とキリストの血肉が共存することを主張する文脈でこの聖人が触れられている (Hudson, ed., p.20)。
19. フローレンスは6行 (ll.2032-37)にわたって告解の必要性を説いている。実際、この作品では告解が重要視されているようである。この場面は言うに及ばず、スタンザ65ではフローレンスの父である前ローマ皇帝が死に臨んで告解する様子が描かれているし、スタンザ94以降にはエグラヴェインによるローマ教皇への告白がある。McSparran は、この写本の思索的、教化的、教訓的な作品群 (ここでは『フローレンス』は想定されていない)が、年に一度の告解を義務化し、聖職者の教養向上を求めた1215年の第4ラテラノ公会議を反映していると考えている (p.viii)。また彼女は化体説がこの公会議およびその後の公会議で教義化されていった点を指摘している (p.x)。ロマンスの作家がラテラノ公会議の議事内容に通じていたかどうかは疑問が残るが、化体説と告解がこの公会議と関係しているのは偶然にしても興味深い。
20. Heffernan は、『フローレンス』と東洋系の類話群を比較して、両者が ‘justice’ のモチーフを共有しており、‘justice’ は中世の思想家にとっては ‘piety’ を包含する概念であったと論じている (*The Orient in Chaucer and Medieval Romance*, p. 108, pp. 119-24)。
21. 本稿の論旨には直接関係しないが、CUL MS Ff.2.38の readership および用途について言及している最近の論文に Phillipa Hardman のものがある。



参考文献

- Dalrymple, Roger. *Language and Piety in Middle English Romance*. Cambridge : D.S. Brewer, 2000.
- Erbe, Theodor, ed. *Mirk's Festial*. EETS es 96. London : OUP, 1905.
- Ghosh, Kantik. *The Wycliffite Heresy : Authority and the Interpretation of Texts*. (Cambridge Studies in Medieval Literature 45) Cambridge : CUP, 2002.
- Gordon, E.V., ed. *Pearl*. Oxford : Clarendon P, 1953.
- Guddat-Figge, Gisela. *Catalogue of Manuscripts Containing Middle English Romances*. Munich : Wilhelm Fink Verlag, 1976.
- Hardman, Phillipa. 'Evidence of Readership in Fifteenth-Century Household Miscellanies.' *POETICA* 60 (2003) : 15-30.
- Hartshorne, Charles Henry, ed. *Ancient Metrical Tales : Printed Chiefly from Original Sources*. London : William Pickering, 1829.
- Heffernan, Carol Falvo, ed. *Le Bone Florence of Rome*. Manchester : Manchester UP, 1976.
- \_\_\_\_\_. 'Raptus : A Note on Crime and Punishment in *Le Bone Florence of Rome*.' *Medieval Studies in Honor of Lillian Herlands Hornstein*. Ed. Jess B. Bessinger, Jr. & Robert R. Raymo. New York : New York UP, 1976. 173-79.
- \_\_\_\_\_. *The Orient in Chaucer and Medieval Romance*. (Studies in Medieval Romance) Cambridge : D.S. Brewer, 2003.
- Hudson, Anne. *The Premature Reformation : Wycliffite Texts and Lollard History*. Oxford : Clarendon P, 1988.
- \_\_\_\_\_, ed. *Selections from English Wycliffite Writings*. rev. ed. Toronto: U of Toronto P, 1997.
- Kölbing, Eugen, ed. *The Romance of Sir Beues of Hamtoun*. EETS es 46, 48, 65. London : Kegan Paul, Trench, Trübner, 1885-94.
- Lee, Anne Thompson, ed. '*Le Bone Florence of Rome* : A Critical Edition.' Diss. Harvard U, 1973.
- McSparran, Frances & P.R. Robinson, introd. *Cambridge University Library MS Ff.2.38*. London : Scolar P, 1979.
- Macy, Gary. *Treasures from the Storeroom : Medieval Religion and the Eucharist*. Collegeville, Minnesota : The Liturgical P, 1999.
- Mehl, Dieter. *The Middle English Romances of the Thirteenth and Fourteenth Centuries*. London : RKP, 1968.
- Rex, Richard. *The Lollards*. (Social History in Perspective) Basingstoke, Hampshire & New York : Palgrave, 2002.
- Rubin, Miri. *Corpus Christi : The Eucharist in Late Medieval Culture*. Cambridge : CUP, 1991.
- Sargent, Michael G., ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*. (Garland Medieval Texts 18) New York & London : Garland, 1992.

- Severs, J. Burke, gen. ed. *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*. Fascicule 1. Romances. New Haven : The Connecticut Academy of Arts and Sciences, 1967.
- Somerset, Fiona, et al., eds. *Lollards and their Influence in Late Medieval England*. Woodbridge : The Boydell P, 2003.
- Tajiri, Masaji. *Studies in the Middle English Didactic Tail-rhyme Romances*. Tokyo : Eihōsha, 2002.
- Vandelinde, Henry Lloyd. 'THE PRODIGAL ONES The Middle English Hagiographical Romances : Genre Identity and Critical Evaluation.' Diss. Queen's U, Canada, 1995.
- Wallensköld, A., ed. *Florence de Rome : Chanson d'Aventure du Premier Quart du XIII<sup>e</sup> Siècle*. 2 vols. Paris : Librairie de Firmin-Didot et C<sup>e</sup>, 1907-09 ; rpt. New York : Johnson Reprint Corporation, 1968.
- 大貫 隆、他・編. 『岩波キリスト教辞典』 東京：岩波書店, 2002.
- 中世英国ロマンス研究会・訳. 『中世英国ロマンス集 第四集』 東京：篠崎書林, 2001.

